

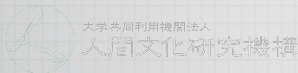


大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

## 人文社会系指標の現状と課題

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国立歴史民俗博物館  
後藤真



大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構

### 人文・社会科学における特徴と指標整理に向けて

2

0. データ整備の重要性→基礎データの不足
1. 著書の位置づけ
2. 「単著」という考え方
3. 非英語による研究
4. 引用される文献の「寿命」の長さ

※今日出てくる数字は暫定値です。

## 著書の位置づけ

- 人文・社会科学研究では、論文より著書の位置づけが高い分野が多い
- 世界的に主要な学術出版社では、出版社が evaluation を行い出版する→そのため、「どの出版社から著書が出たか」が非常に大きな意味を持つ
- 人間文化研究機構における平成27年度の学術雑誌論文／著書論文の比率（暫定値）＝1:2  
（歴博1:1 国文研1:4 国語研1:1 日文研1:8 地球研2:1 民博1:3.5）

## 人文系での指標の可能性

- 書籍の中の論文数を雑誌の論文数とあわせて見る

	書籍内論文数	雑誌論文数	科研費取得 件数順位
東京大学	239	326	1
早稲田大学	151	90	2
京都大学	119	168	3
筑波大学	82	93	15
大阪大学	56	67	4
広島大学	55	35	14
九州大学	54	74	5
慶應義塾大学	51	85	-
神戸大学	48	56	11
北海道大学	46	68	7

Scopusのデータを科研費分類に再分類した後の史学

	書籍	雑誌	科研費件数順位
東京大学	508	26,651	1
京都大学	465	19,413	3
大阪大学	374	17,088	2
東北大学	306	14,813	5
名古屋大学	233	10,146	4
北海道大学	220	10,444	7
九州大学	207	10,644	6
筑波大学	151	6,957	10
慶應義塾大学	148	6,731	15
千葉大学	137	5,073	20

参考：同条件の生物科学

# 量と質を見る

## Top 19 Publishers

- Cambridge University Press
- Johns Hopkins University Press
- Oxford University Press
- Princeton University Press
- University of California Press
- University of Michigan Press
- University of Hawaii Press
- Yale University Press
- Academic Press
- Brill (Leiden)
- De Gruyter Mouton (Berlin, Boston)
- John Benjamins (Amsterdam, Philadelphia)
- Macmillan Publishers
- MIT Press (Cambridge, Massachusetts)
- Peter Lang (Bern)
- Routledge (London)
- Sage Publications
- Springer (Dordrecht)
- Wiley-Blackwell (NY)

東京大学	15.666
京都大学	12.5
九州大学	11.167
東北大学	8.333
慶應義塾大学	7
早稲田大学	5.333
上智大学	5.033
神戸大学	4.666
一橋大学	4.499
大阪大学	3.5

東京大学	56.895
京都大学	43.096
早稲田大学	24.626
神戸大学	23.999
九州大学	19.2
東北大学	16.666
筑波大学	16.332
一橋大学	15.662
慶應義塾大学	15.143
上智大学	15.066



# 単著論文の位置

- 人文・社会系論文は単著が多い
- また、1本の論文あたりに名前をのせる人数も異なる→1人が論文を書く「見かけ上の数値」が減る
- 分数カウントの必要性

順位	生化学・遺伝学・分子生物学	人文科学	医学
1	2.1412	1.6167	2.0496
2	2.0460	1.5498	2.0172
3	2.0405	1.4619	2.0115
4	2.0008	1.7370	1.9194
5	1.9224	1.7104	1.8111
6	1.9340	1.6151	1.9936
7	2.0426	1.7716	2.0010
8	2.1416	1.4731	1.8813
9	2.1937	1.5424	2.0873
10	1.9010	1.3317	1.8134
平均	2.0364	1.5810	1.9585

Scopusから抽出した  
論文数1位～10位の大学の著者数平均  
(ASJC分類 それぞれの列は  
同一大学ではない)

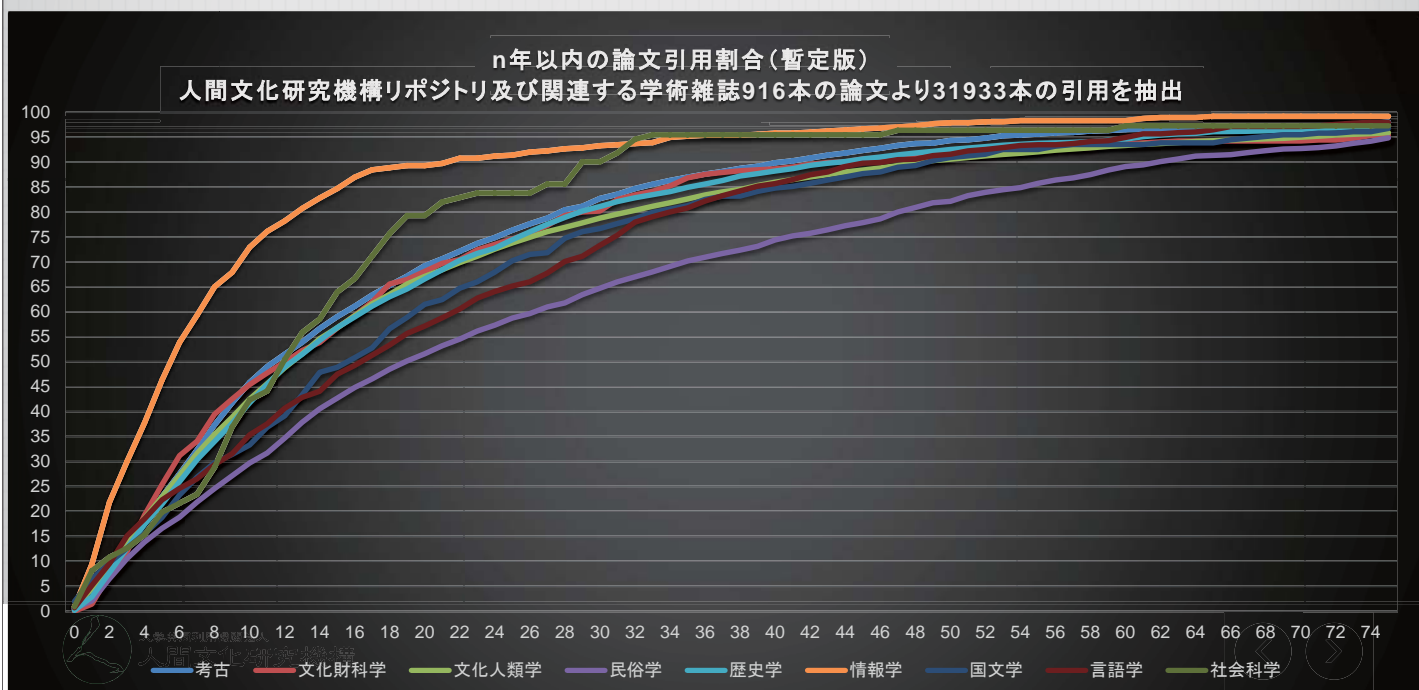


## 対象地域研究の対象地域語成果への評価

- 日本史学における最高の研究は日本語で行われている
  - そもそも、日本の昔の資料を英語に翻訳するどころかローマ字にすることも難しい→研究そのものが言語依存
- これは、日本語だけの問題ではなくドイツ語やフランス語でも同じ状況
- 「自国・地域の言葉でいかに研究ができるか」は先進研究国のメルクマール  
(もちろん、英語での接続ができることも前提)
- 文学・史学・実定法などは、対象言語の留保が必要

## 論文の被引用期間の長さ

- 人文・社会系論文が引用される期間は長い⇨論文の「寿命」が長い
- (人間文化研究機構のリポジトリの現時点の集計によるかぎり) 情報学と、人文系論文では2倍ほど被引用のされ方が「遅い」(暫定値)

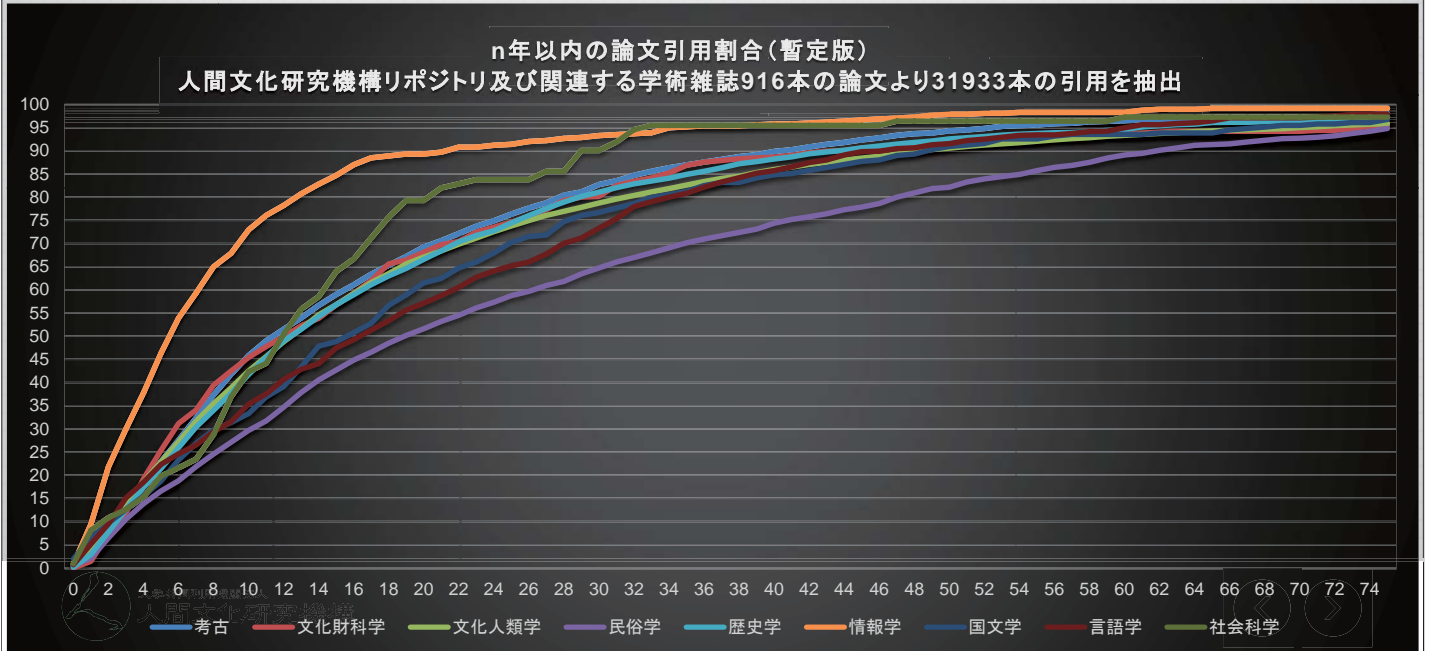




# 論文の被引用期間の長さ

9

- (リポジトリでの) 情報系の論文にて引用する論文は50%が5年以内のもの
  - 歴史学・文化人類学・言語学等の論文で5年以内の論文は全体の25%程度
  - 国文学では全体の約25%、民俗学にいたって約35%についてが30年以上前の論文の引用である
- 引用の分析の期間をより長くとの必要性



## 人間文化研究機構のとりくみ —今後に向けて—

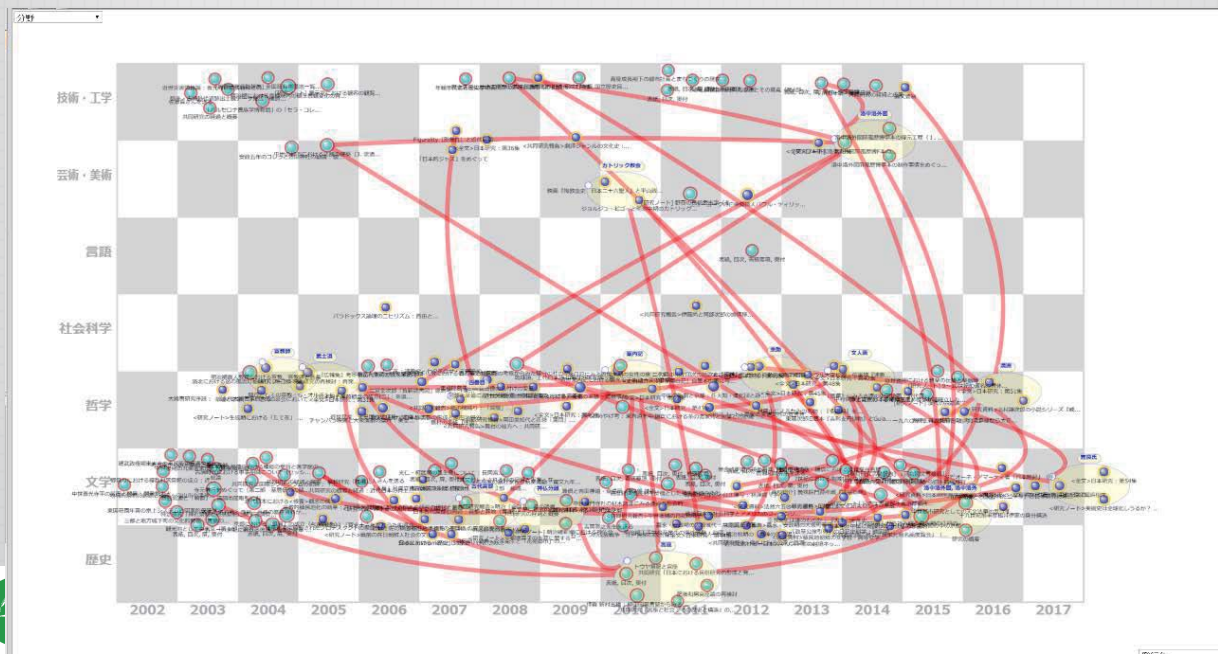
10

- データ収集の継続
  - 業績の総合的な収集システムの再構築から
  - 書籍・単著論文の重みづけの検討
  - 日本語論文の計測 (国際性と両にらみ)
  - リポジトリからの情報の抽出→そもそもどのような引用傾向があるのかを
  - 人社系については機構と大学で連携して、学術雑誌の位置付けなども検討を進める

# 人間文化研究機構のとりくみ

11

- 質的な情報を解析し、可視的に見るような検討も実施（サイエンスマップ人文版（仮称）などによる）
- 学問の多様性の維持と、多様な学問の中での大学・大学共同利用機関法人の「世界の中での強み」を探る



## 今後への重要な課題

12

- 成果の電子化→根本的にデータが不足している
  - 書籍も含めた論文データベース整備の重要性→自己申告ではなく、外的に分析可能にするためにも
  - 学会などでやれることもあるのではないかと？ 国際性
- 引用されているものの対象は何か？
  - 人社が重要としている価値のある仕事とは何か？
    - 例えば「引用」としてひいている「資料」をどのように評価するか
  - 分野の「大きさ」の問題
- Output以外の「質」をどう見るかも今後の課題
  - 地域に貢献する人社系教員（自治体などの外部委員（地域におけるシンクタンクとして）などの評価も）
  - 巨大会誌＝意義があるというわけでもない
    - 巨大会誌より大きな市場もありうる
    - 一方で少数でも分野にとって大事なものもある

ありがとうございました